

### 佐賀県平坦部におけるコシヒカリの極早期栽培

山本 勇・田中 靖・福田 敬・三原 実 (佐賀県農業試験研究センター)

Isamu YAMAMOTO, Yasushi TANAKA, Kei FUKUDA and Minoru MIHARA :  
Stable cultivation of "KOSHIHIKARI" in Early Season Rice Planting in Saga Prefecture

コシヒカリの旧盆前出荷は、有利販売が可能であるが、品質・収量は低下しやすく、収穫時期の年次変動も大きい。

このため、移植時期、苗の種類及び栽植密度を違えて、刈取時期、収量及び品質に及ぼす影響を調査し、平坦部における極早期コシヒカリの安定出荷をめざした栽培法について検討した。

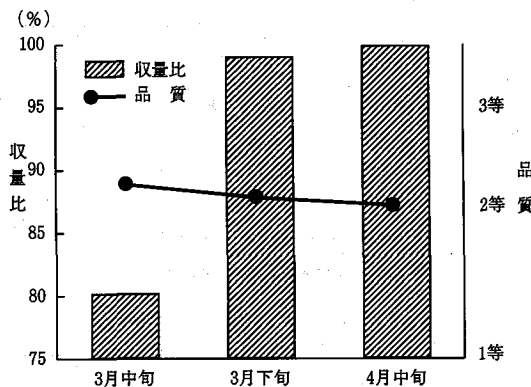
#### 1. 材料及び方法

試験は「コシヒカリ」を用い、1990年～93年の4か年実施した。移植時期については、3月上旬から4月中旬、栽植密度は22.2株/m<sup>2</sup>とし、湿籾180g/箱の稚苗を使用した。苗の種類については、乳苗(湿籾350g)、稚苗(同180g)、中苗(同150g)、成苗(70g)、ポット成苗(70g)の5種類、移植時期は4月中旬、栽植密度は22.2株とした。栽植密度については、ポット成苗を用い、33.3株、27.8株、22.2株、11.1株の4段階、4月中旬移植で検討した。また全試験とも施肥はa当たり窒素成分で元肥を0.3kg、穂肥Iを0.2kg、穂肥IIを0.1kgとした。

#### 2. 結果及び考察

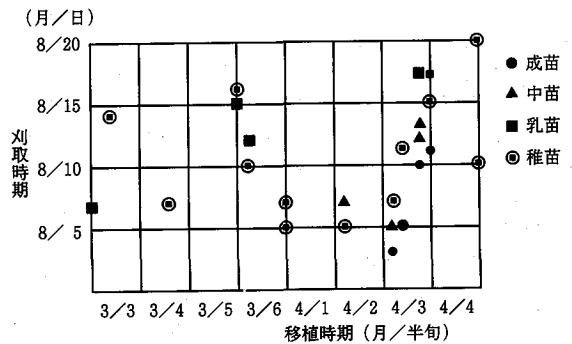
移植時期についてみると、旧盆前出荷の晩限と考えられる8月10日までに収穫できたのは年次変動はあるが4月上旬移植までで、4月中旬以降移植では盆前出荷は不可能であると考えられた。また、移植時期が早まるほど収穫時期は早まる傾向は示したが、佐賀県の晩霜は4月上旬であり、霜による活着や初期生育への影響は大きく、3月中の移植では早進化の傾向はほとんど見られなかった。また、収量は早植えよりも、移植時期が遅くなるほど多くなる傾向を示した(第1図)。

このため、苗の種類による熟期促進について検討した



第1図 移植時期と収量・品質

が、苗齢が1葉進むことで熟期は2～3日早まり、中・成苗を用いることで、4月中旬移植でも旧盆前出荷は可能と推定された(第2図)。また、収量・品質についても、稚苗より中・成苗の方が向上した。これは、極早期栽培では気温が低く、出葉速度が遅いため、移植時苗齢の影響が大きいものと考えられた。



第2図 移植時期と刈取時期

また、極早期栽培は収量が低く、品質も低下しやすい傾向にあるが、栽植密度を高めることにより、生育量が確保され、収量は向上した。また、穂相からみると密植ほど1穂粒数は減少しており、2次枝梗割合が低下し、品質は向上するものと考えられた(第1表)。

第1表 栽植密度と収量・品質

| 栽植密度 (株/m <sup>2</sup> ) | 穂数 (本/m <sup>2</sup> ) | 一穂粒数 (粒/穂) | 収量 (kg/a) | 品質  |
|--------------------------|------------------------|------------|-----------|-----|
| 33.3                     | 476                    | 61.0       | 58.7      | 2等中 |
| 27.8                     | 453                    | 64.6       | 54.0      | 1等下 |
| 22.2                     | 435                    | 68.0       | 54.6      | 1等下 |
| 11.1                     | 359                    | 69.5       | 53.0      | 1等下 |

注) 移植時期: 4月14日, 苗の種類: ポット成苗

以上のことから、旧盆前出荷のための移植時期としては乳苗を利用する場合は3月上旬まで、稚苗を利用する場合は3月下旬、中～成苗を利用する場合は4月中旬が晩限であるが、収量・品質の安定性も加味すると、中～成苗を用いる晩霜後の4月10日頃移植が一番良いと考えられた。また、この場合、栽植密度は可能な限り密植する必要があると思われた。